
リアルサバイバルゲーム

自宅警備兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルサバイバルゲーム

【NZコード】

N8243Y

【作者名】

自宅警備兵

【あらすじ】

ひきこもりがちな主人公一色武は、ある日サバイバルゲームの誘いを受けコンビニで待ち合わせをする。しかしコンビニに強盗が現れ、金ではなく「食料を出せ」と要求する。不審に思う武を他所に、突如如何者かに強盗が突き飛ばされ、事態は一変する。外には血まみれの人々が人を襲っていた。ひきこもりの主人公と仲間達が巻き起こす、リアルサバイバルゲーム

外に出たから……（前書き）

初めて投稿します。こちらの作品が処女作ですので、文章や表現など足らぬところがあると思いますが、暖かく見守っていただけた嬉しさです。この作品を機会に、少しずつ不定期ですが、小説活動をしていきたいと思います。

外に出たから……

【強気をくじき弱きを助ける】

そんな正義の味方に、誰もが一度憧れただろう。勸善懲惡の精神で、いつも悪を倒しヒロインを助けるのだ。まるで「感謝の気持ちだけで十分」と言わんばかりに、金も貰わず去つて行く……

そんなヒーローに僕は憧れていた。

20XX年 東日本 7月26日 午前7時50分

引き籠もりがちな僕、一色武中学三年生はこの日、久々に友達の三人と遊びに行つた。

内容はサバイバルゲーム。なんでも同年代の中学生でサバゲーのチームを組んでいる子達が隣町に居るらしい。その子達と対戦に行くのだ。バスで行くのだが、友達とは一旦近くのコンビニで待ち合わせている。

(早く着きすぎたかな?)

早歩きすぎただろうか?久々のサバゲーで気持ちが高ぶっていたせいだろう。まだ友達は来ていない。

暑い日差しの中、武はコンビニの前をウロウロする。エアガン入りの長いリュックは目立つので店内には入りたくないのだ。人通りの少ない日陰に移動して待つていよう。そう考えて店内に入らず僕は足早にコンビニを離れようとする。

「おーいー武！何処行くの？」

足を止め振り返つてみると、そこには「」の対戦を企画した友達の鈴木隆太が居た。武は鈴木が居ることに安堵した。一人では心許無かつたのだ。挨拶もそこそこに店内に入る。

「隆は店の中にいたのか。気づかなかつたよ」

「普通店の中に居るだろ？コンビニ集合なんだから。」

「それもさうだけど……その荷物は田立ちすぎじゃない？」

そつと隆の背中を指差す。そこにはコンビニには似つかない銀色で長方形のガンケースが堂々とぶら下っていた。店内の客の好奇の眼差しも気にしていない。歩くたびにBB弾の音を響かせながら、隆は飲料コーナーへ向かう。

「そんなに田立つてるか？一々気にしてたら街中でアタッショケース持てないぞ」

「いや凄く田立つてる……街中でだつてそんな長方形のケース持つてたら田立つよ」

「そうだな。まあコンビニ強盗とは間違われないようにしてないとね」

そう言ってスポーツドリンクとレジ前のガムを店員に出す。この間にB B 弾の音はなる。

(面倒起じやず無事に会計を済まして出て行つてくれれば、店員もそんなに気にしないだらう。……)

そう思つても、僕は早く店の外へ出たかった。ただでさえ外が怖いのだ、下手に注目なんか集められたらまたものじやない。

……薄々気が付いていたが、他の客は余り気にしていないようだ。
考えすぎは良くない。

レジで隆が出した十円ガムの一つ一つを、バーコードを読み取つて
いる店員は、若い男性だ。名札を見てみると、^{やまだたろう}山田太郎といつらし
い。平凡な名前だ。それにして

「うるああああああああ……全員動くなあああ……！」

店内に大声が響き渡る！まるで取引現場を押された時のような、はたまた銀行強盗か、場違いな声量で怒鳴りつける。走ってきたのか息が荒い。

「うおっ！…なんですか！？あなた…！」

僕が声の主を見るよりも早く、店員が答える。

「ラッショだ！！伏せろ！！！」

隆が叫びながら伏せる！

僕は、一瞬頭が真っ白になつたが、状況を把握した。

そこには強盗がいた。

咄嗟に拳銃を見ると、引き金に指を掛けっていない。ズブの素人じやなさそうだ。

格好は帽子にマスクに拳銃。まんまとドラマの銀行強盗だ。金田眞での小悪党か。

生まれてから一度も強盗に巻き込まれた事が無かつたが、あまりにも想像通りの強盗犯に呆氣をとられていた。

しかし、犯人から発せられた要求は、予想とはちがつた。

「食料をだせ！！水もだー！わつわとこりー！ーあいつらが来るぞー！
！ー！ー！」

店員は戸惑いながらも、答える。

「ー？分かりましたー出しますから誰も撃たないで下をー！」

店員は手を上げながらレジ置き場から出る。強盗は固まつたままの僕に拳銃を向け、伏せるように指示する。伏せながら周りを見ると、強盗の指示で、他の数名も隆を真似て、背中で手を組んで伏せていた。

強盗は棚の向こう側に行つたからか、先ほどまでの緊張感は和らいだ。小声で隆に話しかける。

強盗が棚の向こう側に行つたからか、先ほどまでの緊張感は和らいだ。小声で隆に話しかける。

「……いつ時つてパークつて動けないな、本当に一瞬止まつたよ……」

「……映画見てて良かつたよ。まつたく」

二人が小声で話し合つてゐる間にも、強盗の声が聞こえる。

「早くしろよーこの袋にありつたけ詰めりー俺は出口を見張つて
るーーーちゃんとやれよーーー！」

「分かりました」

そう言つて強盗は出入口付近を見張る。リボルバーらしい拳銃で
外と店員を交互に見ている。

……おかしい。おかしいぞ。

「隆ちよつと……」

出口の方へ顔を向けている隆に話しかける。

「ねえおかしくない？」

「なにが？」

「どうして金じゃないんだ？食料なら金で買えるのに」

「分からねえけど……腹でも減つたんじやねえの？」

「まあ理由はともかく、さつき言つてた”あいつ等”って何だらう

？」

「警察だらう。それより静かにしとけ……」

そつ言つて隆はまた出口の方へ顔を向ける。

「おーーーー早くしてくれーーーー困まれてゐるーーーー」

強盗が叫んだ。落ち着きのない足音が聞こえる。

もう敬^{けい}察^{さつ}が困^{こん}んでるのか? 早いな」

……返事が無い。いや、返答を求めるような言葉じゃなかつたのだが、隆は出口を向いたまま後頭部だけ此方に向けている。

「うわ……おーー見てみるよーあれー。」

隆がびっくりしたような声あげる。しかし出口付近の強盗は隆の荷物で見えない。

「どうしたんだ?何があつたか?」「来るぞ……来るー!」

隆さんはいつの間にか素早く立ち上がり、手を上げる。

「おこ！お前！向ひせつてゐる！」「

「お願いですから！何を取りませんから出させてください！」

強盗に負けず劣らずの声量で、隆は手を上げたまま強盗に話す。強盗は外を見張つていふ。

「なにやつてんの！ 隆！！」

「お願いしますよー。お願いだからー。」

外から目線を外した突然強盗が此方に倒れこんできた！見てみると、

高校生くらいの若者が強盗相手に取つ組み合いをしていた。

「うわあああわわあ！……離れる！……糞！……！」

強盗が取つ組み合いをしている中、とつさに隆が手を引っ張り僕をおきあげた！

「見てみろ武！！」

驚いて突つ立つていい僕の肩を叩き、外を指差す。

「なんだよ！これ！……！」

そこには、人が人を食らいつき、死に物狂いに逃げ回る、まさしく地獄絵図だった

外に出たから……（後書き）

作品読んでいただき、ありがとうございます。

まだまだ初心者なので、感想やアドバイスなどいただけるとありがたいです。

次回から戦闘シーン等入れていきたいと思います。

また頑張って書きます。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8243y/>

リアルサバイバルゲーム

2011年11月24日17時53分発行